Osaka University Knowledge Archive

Title	企業経営における危機管理の研究 : 社会心理学的アプローチを中心に
Author(s)	前中, 将之
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59114
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【1】

氏　　名	前　中　将　之（まえ なか まさ ゆき）
博士の専攻分野の名称	博　士（経営学）
学　位　記　番　号	第　２４８２６　号
学位授与年月日	平成23年５月26日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 経済学研究科経営学専攻
学　位　論　文　名	**企業経営における危機管理の研究：社会心理学的アプローチを中心に**
論文審査委員	（主査） 教　授　小林　敏男 （副査） 教　授　金井　一賴　　准教授　関口　倫紀

論文内容の要旨

本論文は，「企業経営における危機管理の研究：社会心理学的アプローチを中心に」と題し，企業は何故自ら意図せず危機を発生してしまうことになるのか，の問題意識のもと，組織マネジメントの慣性に焦点をあて，理論サーベイおよびケース取材から仮説を構築し，実験を通じて実証のうえ，危機管理のありかたを提言している。

第1章では，不祥事が，企業イメージのみならず，費用面においても，甚大なダメージを企業に与えることをケースによって紹介し，危機管理の重要性を確認する。その対策について，機械安全の考え方に基づく議論を紹介し，それだけでは不十分で，マネジメントリスクへの対策の重要性を強調する。組織構成員は事前にリスクを認識しつつも「不作為」に陥り，そのことが企業にとって甚大な危機を招くことになる，という主張である。

第2章では，危機管理に関する先行研究を渉猟し，それらの有効性と限界について議論する。危機に関する定義をもとに，本論文があらゆる危機を研究対象とせず，外的要因（自然災害など），未知の事象による内部要因，および既知ながらも不作為による内的要因に分類し，企業組織に与えるダメージの程度から，不作為による内的要因を専ら検討することの妥当性を検証する。

第3章では，組織における不作為のメカニズムについて，社会心理学の観点から分析を試みる。まず，個人の意思決定における生理学的特性および認知的特性からの影響を考察する。次に，組織マネジメントの原則としての効率性追求および従業員への忠誠心教化による個人への意思決定過程への影響を考察する。これらの考察を踏まえ，第4章にて不作為からの危機発生に関する理論モデルを提示する。

実証過程は2種類である。まず，企業での事故事例における不作為モデルのフィットネスを確認する。過度なプレッシャーが個人の意思決定に影響を与えること，小さな逸脱行為（規則通り行動しない）がその後の大事故が発生するまで繰り返されてしまうこと，現場での判断が事態の予測を困難にしていることが，詳細に記述される。次に，企業での仮想実験を通じて，すなわち集団作業において個人にプレッシャーが与えられる仮想的状況下での実験によって，ルール違反（不作為）がどの程度発生するのかが確認されている。これらを踏まえて，第5章では企業の危機管理における注意点が示されている。

企業組織における危機管理の難しさは，組織存続の観点から一方でマネジメントを強化しつつ，その行き過ぎをどのようにチェックするのか，という問題と同義であることが，不作為という観点から導きだせている。効率性と衡平性のバランス問題であるとも言えなくはないことを明らかにし，具体的な対応策が論じられている。

論文審査の結果の要旨

本論文は，「不作為」というこれまでの経営管理論においてはあまり扱われてこなかった概念に着目し，社会心理学的知見に基づき，危機発生のメカニズムを明らかにしたうえで，事例および実験を通じて実証した，意欲的かつユニークな研究である。実験における条件設定および実験数の少なさ（3件）においていささか問題点を指摘できなくもないが，それらは決して本論文の価値を希釈化するものではない。よって，本論文は，博士（経営学）の学位に十分値するものであると，判断する。